

旧制佐賀高等学校の生徒として

福岡市城南区

樋口 大成

昭和19年4月、私が旧制の佐賀高等学校（佐高）理科に入学したのは18歳の時で、太平洋戦争は既に日本の敗色濃厚だった。

だから入学以後、私達は肉体的には極限の毎日だった。空腹、日々10時間の授業（軍事教練、体育強化を含む）、日曜日ごと遠方に農作業。休日なし。ただ、私はこの稿で肉体の苦痛を記すつもりはない。

全寮制だった。入学した日、寮長（2年生）の部屋に集まれという。しごきを覚悟で行ったら、2年生が威張って「オーマン精神（些事にとらわれない）を身につけろ」と説教。ほっとした。現在でも心の糧の一つである。

その夜中のことである。自寮室で眠っていたら、運動場に集合せよと叩き起こされ、新入生は2年生全員からとり囲まれた。ストームだということだった。それは伝統ある寮歌を乱舞しつつ歌いまくることだった。

南に遠く振古より ゆえ知らぬ火の起こり立ち、
明け暮れ若き血に煮ゆる 男の鴻図うながせば……………

ストームは翌朝が白み始めるまですっ裸でやらされ、疲れると水をぶっ掛けられ、最後は立てないほどになった。ふと死闘している戦場の兵士を思う時、これは少し違うのではと考えたりしたが、私達を取り巻いていた多くの先生方は大変好意的な表情だった。

ただ私達は、もともとこの戦争には多少疑問を持っていた。太平洋戦争の目的は大東亜共栄圏の建設にあるということに疑問があった。この戦争の原因は日中戦争で、その日華事変の原因は満州国建設にあることを知っていたからである。

私達は満州国建国の侵略性を日本の善意でカバーし、中国や国連から温かく承認される努力をして、東亜侵略100年の欧米に対して国力を蓄えておくほうが良いのではないかと話し合ったものだった。当時はここまでしか思い及ばなかったこともまた事実でだった。

でも現実には戦争になったのだから、負けるわけにはいかなかった。負ければ国土は外国のものとなり、私達は奴隷になると信じ、負けられぬ思いと戦争への疑問の狭間にあった。

しかし、これらの私達の思考を超えて、授業は戦争とは無関係に進められた。

例えば、サイパン島の日本軍が玉砕したことを知った朝の国語の講義は、杉浦教授による「女心」で、高尾太夫の“忘れねばこそ思い出ださず候”であった。英語の授業は週に6時間あって、田辺教授の「二都物語」（ディケンズ）の厳しい講義だった。私達は数学の宿題と英語の予習に追われ続けた。

その頃日本を支配していたという「英語は敵性語」の考えは私達には届かなかった。一度だけある。軍事教練時、小隊長（学級委員）が「プールの右側を通過して走れ」と号令すると、平

山大佐が飛んできて「プールではない、水溜めだ！」と怒鳴った。私達は爆笑し演習一時中絶。やがて大佐は「状況開始。敵機コンソリデーテッドB24来襲！ 小隊長判断せよ」と言った。小隊長は咄嗟に「コンソリデーテッドは敵性語でありまあす」と言い返した。その時の大佐の驚いた顔。軍隊でこんな経験はなかったことだろう。やがて大佐は気を取り直して「ほかに言いようがない」と言った。これで二度の爆笑となって教練は腰が抜けてしまった。

このように敵性語などと言うほうが恥をかいた。私達は鬼畜米英、天皇は神様などという話はナンセンスだと思ったし、一億玉砕の戦いというに至っては軽蔑するのみだった。そんな戦争ではない筈だと話し合った。

佐賀から久留米までの完全武装の夜行軍は4回くらいあったが、苦しいものだった。でも教練の教官が「軍歌を歌え。天に代わりて不義を討つ、ハイ！」と言うと、私達は、

暁近き野に出でて 光りを待ちて佇めば

まどいの夢は覚めにけり

といったのんびりした調子の寮歌を歌った。ドイツ語の原田教授は鬼のように恐かった。が同時に、ドイツの歌曲「野薔薇」「ローレライ」「菩提樹」「会議は踊る」などを教えてもらって愛唱した。そんなある日、同級生が何かのことから「僕は国を愛しています」と言ったら、原田教授は「一人のメツチェン（娘さん）も愛せぬ奴が国を愛するなどとフテエことを言うな」と叱り飛ばした。

私達は街を歩く時には、破れ帽子から長い髪をはみ出し、腰には手拭を長くぶら下げ、高下駄を履いてカランコロンと歩き、佐賀の人々からは好意的な目で見られていた。小うるさい平山大佐と街角でばったり出会ったら、ひたすら遁走（とんそう）すればよかった。

こうして昭和20年4月、沖縄戦が始まっていたが、私達は2年生になり、軍需工場に動員となった。そして8月、終戦を迎えた。

工場では肉体的な苦痛も多く、空襲も受けて生死の境を逃げ惑った。しかし肉体的苦痛は別として、佐高の教育は何だったのか、戦後50年の今、思い返してみた。

人間の頭脳は、教育、環境、更には意図的な操作によってどんなにでも改造されるものである。誰でも、ヒトラ・ユーゲントにも紅衛兵にも、またとんでもない宗教の熱中者にもなる必然性を秘めていると思う。

これを避けるためには、賢い知性と豊かな感性の基礎の上に立つ自主性が必要である。

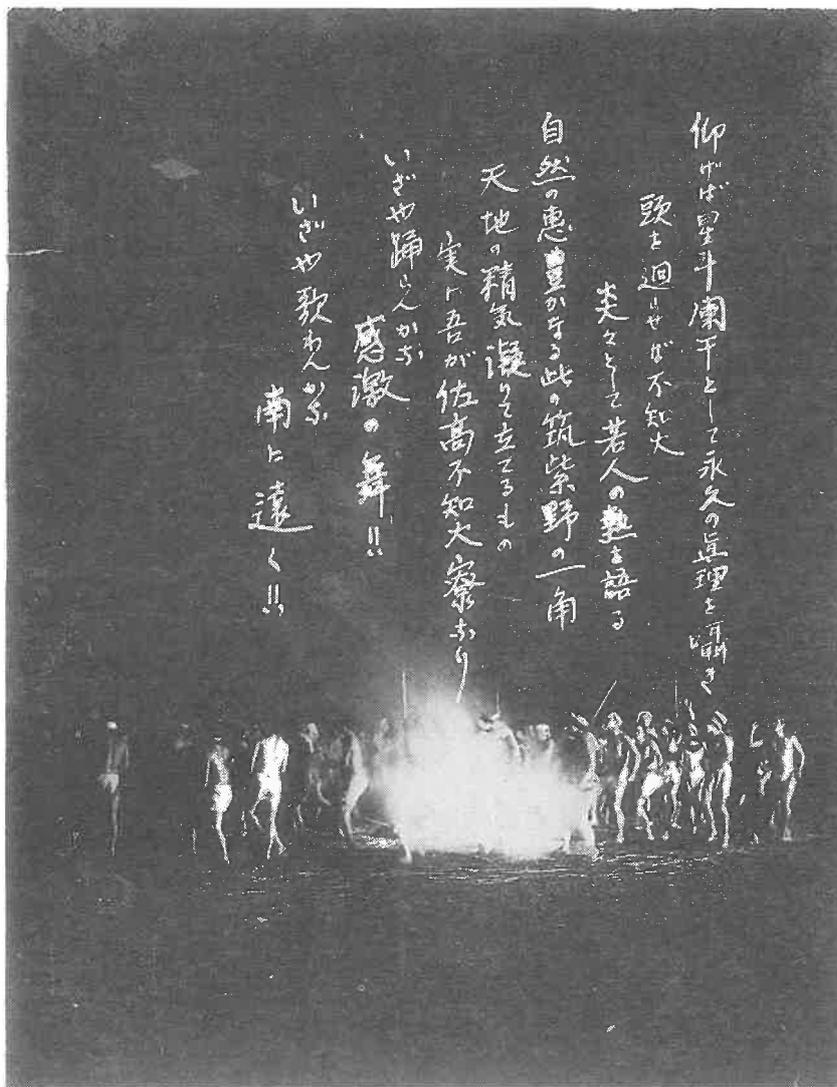
旧制の高等学校にはこの誇りがあって、戦時中といえども、キャンパスの中で守り続けていたということである。戦時中に愛国心を持つのもまた当然のことで、ただ自分なりに考えたものであれということだった。

否定されるべきは洗脳のほうだった。

付け加えれば、私の父は戦時中陸軍師団長だったが、私が弊衣、破帽、高下駄で帰宅し、授業やストームの話を得意になってすると、一緒になって喜んでくれ、青年のロマンティズムこそ大切と評価していた。だから私は、父は立派な軍人だったと尊敬している。

旧制高校の教育には現在の教育よりも優れている点が多々ある。もしも戦時中のすべてが悪だと現代の人に伝えるならば、それは温故知新を忘れ、現代の若者を別の意味で洗脳していることになる。これは怖いことだ。

私は学校の教師を職業としてきたが、自分が旧制高校で学んだ理念を教師の立場から学生に施すことが不十分だったと思っている。この後悔と、戦時中とはまた違う現代の世相を整理して、教育をテーマに世に語ることは私に残された仕事だろうと思っている。



ストームの様子